

話題 其の30: “パレスチナ紛争” 現状と問題

8月19日から22日までの4日間、セミナーを主催しました。参加者は職業訓練センターに勤務する主任クラスの先生達です。彼らはレバノン、シリア、ヨルダン川西岸自治区、ガザ自治区、地元ヨルダンから参加してきました。

ヨルダン川西岸自治区から参加した先生の話によると、同地区内に点在する“ユダヤ人入植地”を通過するたびに通行許可の検問があり、僅か100kmに満たないアンマン市まで約12時間もかけてやってきました。中には検問所の通過が許可されず参加できなかった人も居ます。

彼らには、ヨルダン政府からの入国許可に必要な書類を事前に渡しているのです。この書類のない人たちがヨルダン国境に3000人くらい居て、出国待ちや交通機関の利用待ちで待機しているそうです。中には待機中に手持ち資金が無くなり引き返す人も居るそうです。

一方、地中海沿岸に位置するガザ地区からの参加者は、イスラエル領土とヨルダン川西岸自治区の通過が困難です。従って陸路エジプトの首都カイロまで出て、次の日に空路ヨルダンにきました。

彼らの心配は、無事故郷へ入れるかと言う事です。

パレスチナ難民にとって、イスラエル領土を通過するということはそれほど困難なのです。

「4~5日の足止めは覚悟しているよ・・・」彼らのたくましさに関心させられます。

セミナーへの受講は久々に平和なヨルダンで、昔懐かしい他の訓練センターからの参加者との集いや、新たな出会いのひと時を楽しんでくれました。

特に、開講式には在ヨルダン日本大使館の佐々木大使にスピーチを戴くことが出来、困難な環境の中で、直接訓練生に向き合う彼らを励ますものでした。

セミナーの内容も、グループ討議を中心に活発な意見交換が行われました。

そして最終日、覚悟も新たに(多分)家族が待つ紛争地域に帰って行きました。

先日JVC(日本ボランティアセンター)で活動するメンバーお二人からヨルダン川西岸での活動の様子を聞くことが出来ました。

メンバーの一人は看護師さんで、この4月に西岸地区で活動したときの話を伺いました。

彼女の話では、以前5%に満たなかった自宅分娩が80%ほどに増えているそうです。

その理由は、やはり隣町の病院へ行くにも幹線道路に点在する検問所の通過が困難だからです。

以前、検問所前で車の中で出産したパレスチナ女性の新聞記事を目にしたことがあります。

通過が承認されても当日内に帰ってくるのが条件ですから、妊婦にとっては不可能に近い条件です。

彼女の言葉を借りれば、『妊産婦たちはイスラエル軍による閉鎖のために、いざというときに必要である病院における第2次医療を受けることができない状況にある。それは、お産そのものが、母子ともに命がけの行為となっていることを意味している。』

イスラエル側も“自爆テロ”の恐怖に怯え、パレスチナ人の行動を監視、制限しているのです。

時には救急車さえ過激なテロリストの隠れ蓑として破壊するほどです。

と言っても、限度を超えていますよね。

ユダヤが奪ったのは、パレスチナの土地、パレスチナ人の生活、家族、財産、平和・・・・。

そして今回新たに気付かされたのは、“自由を奪われた”ことです。

制限無く自分の行きたいところへ、行くべくところへ行くことの出来る自由。

平和という安心できる環境に身を置き、心を開放すると言う自由。

紛争から何が生まれるのでしょうか?

紛争の中に居て、それを止められない人たち。

問題意識を持って、何か出来ないかと活動を続ける人たち。

紛争を見て悲しむ人たち。

それを見ているだけの人たち。

関心さえもない人たち。

私自身も、パレスチナ紛争以外には問題意識の薄い人間だとの反省があります。

問題は個人の意識にあるのでしょうか。

「何が出来るか?」も大切ですが、何が起きているかを「正しく理解する」事が先決ですね。

今回は、そのメッセンジャーになりたいと思いました。
